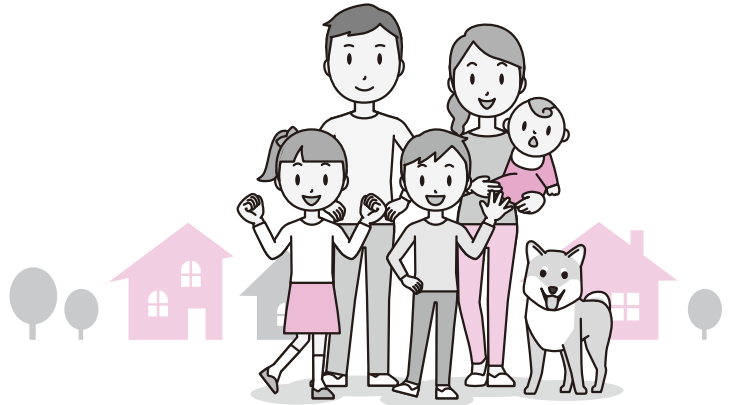


第1部

総論

第1章

はじめに



1. 総合振興計画とは

総合振興計画とは、地方自治体が将来目指す姿と、それを実現するためにどのようなことに取り組みかを示した計画です。

地方自治体が策定する計画は、分野ごとにたくさんありますが、総合振興計画は、こうした各種計画のうち、一番上に位置する「最上位計画」であり、最も重要な計画です。

2. 計画策定の背景

本町では、平成22年度に「第4次六戸町総合振興計画」を策定し、『恵みの大地と人が結び合うやすらぎと感動の定住拠点・六戸』という将来像の実現に向けた様々な取り組みを行い、着実に成果を上げてきました。

しかし、計画策定後およそ10年を経過した今日、少子高齢化・人口減少の急速な進行、全国各地における大規模な自然災害の発生をはじめ、社会・経済情勢は大きく変化してきています。

また、町内においては、“保健・医療・福祉の充実”や“子育て環境・教育環境の充実”が引き続き強く求められているほか、“快適で安全・安心な住環境の整備”を重視する傾向が強まっています。

こうした社会・経済情勢や町民ニーズの変化に的確に対応し、将来にわたって活力と魅力ある六戸町を築いていくため、「第4次六戸町総合振興計画」の成果と課題を踏まえ、また、新たな視点と発想を加え、「第5次六戸町総合振興計画」を策定します。

なお、本計画が、多くの町民に自分たちのまちづくりの目標として親しまれ、町民の積極的な参画・協働のもとに未来の六戸町を築いていくという思いを込め、計画の愛称を、「ろくのへ未来計画2030」と定めます。

3. 計画の基本事項

(1) 計画の役割

本計画は、次のような役割を持つ計画として策定しました。

町民みんなのまちづくりの目標

町民にとっては、本町の将来像や、その実現に向けた取り組みを行政と共有し、まちづくりに積極的に参画・協働していくための目標となるものです。

町行政の総合的な経営指針・主張

町行政にとっては、活力と魅力あるまちをつくり上げ、将来にわたって持続していくための総合的な経営指針となるとともに、国や青森県、周辺自治体に対し、六戸町の主張を示すものです。

(2) 計画の構成と期間

本計画は、次のような構成と期間の計画として策定しました。

基本構想

本町が10年後に目指す将来像と、それを実現するための計画の体系や方針などを示したものです。

計画期間は、令和3年度から令和12年度までの10年間とします。

基本計画

基本構想に基づき、今後行う施策を示したもので、社会情勢や町民ニーズの変化に対応できるよう、前期・後期に分けて策定します。

前期基本計画が令和3年度から令和7年度までの5年間、後期基本計画が令和8年度から令和12年度までの5年間とします。

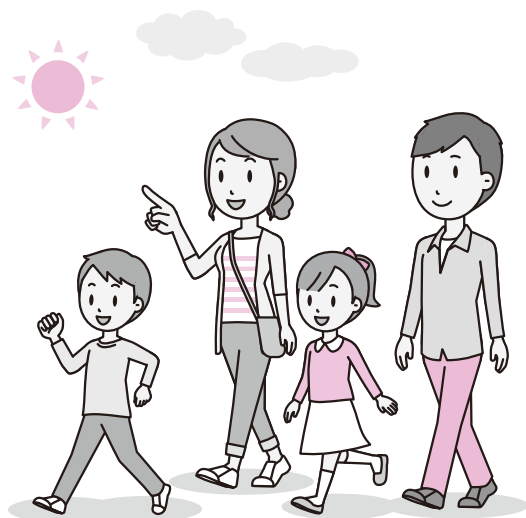
実施計画

基本計画に基づき、今後行う具体的な事業や事業費等を示したもので、別途策定します。

計画期間は、向こう3年間とし、毎年度見直しを行います。

第2章

六戸町の 特性と課題



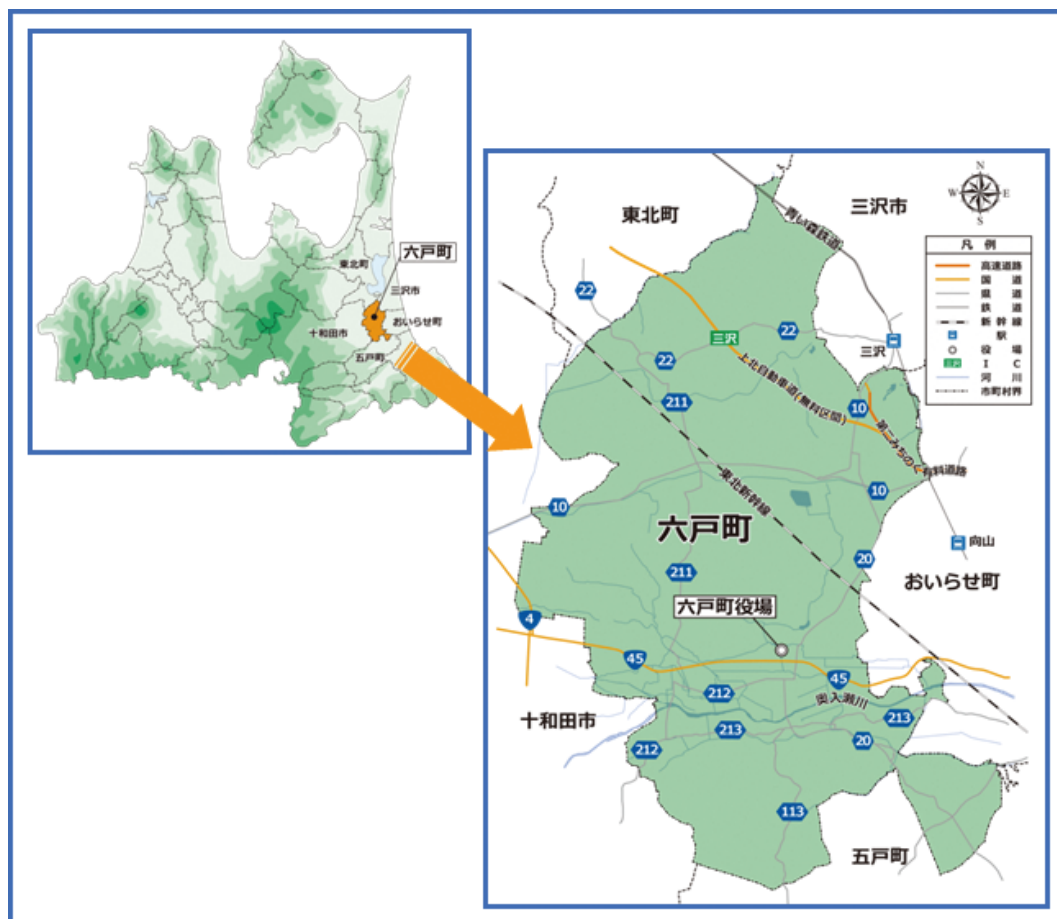
1. 六戸町の概要

(1) 位置と地勢

本町は、青森県の東南部に位置し、東はおいらせ町、南は五戸町、西は十和田市、北は東北町及び三沢市と接しています。

東西10km、南北15km、総面積83.89km²のまちで、目立った高地や山岳はなく、台地と平野が大部分を占めており、奥入瀬川が町の南部を東西に流れ、その流域には農地が広がっています。

六戸町の位置



(2) 沿革

六戸という地名は、村をさしたのではなく、鎌倉時代、平泉の藤原氏が討たれたとき南部光行公は征伐の大功によって源頼朝より糠部五郡（青森県南部と岩手県北部）を賜り、軍馬育成のため九ヶ戸四門制に分け一つの戸に一場を設けたとされる説と、それ以前兵站基地として戦略の都合上つけたとされる説とがあります。いずれにせよ、奥入瀬川流域一帯を“六戸”と称しました。

藩政時代は、南部（盛岡）藩の統治下にあり五戸代官所轄となっていました。その後七戸藩に属し、明治4年廃藩置県により、当初七戸県、続いて弘前県、10月には青森県に統一され、さらに、明治6年の大小区制、同11年の郡制施行、明治22年市町村制施行により、折茂村、柳町村、小平村、鶴喰村、犬落瀬村、上吉田村、下吉田村の7ヶ村が合併して六戸村となりました。

その後、昭和32年10月町政を布いて六戸町と改められ、平成29年10月には、町制施行60周年を迎え、現在に至っています。



奥入瀬川から望む八甲田連峰

(3) 人口の状況

① 総人口

本町の総人口（平成27年国勢調査）は10,423人で、平成22年の10,241人から182人増加し、増減率は1.8%となっています。

これまでの推移をみると、平成に入ってからは一貫して微減傾向でしたが、直近5年間では微増に転じています。

青森県の40市町村のうち、直近5年間で人口が増加したのは2町、人口が減少したのは38市町村ですが、六戸町は、増減数（182人）・増減率（1.8%）ともに第1位となっています。

総人口と増減数・増減率

年	項目	人口(人)	増減数(人)	増減率(%)
平成7年		10,523	-92	-0.9
平成12年		10,481	-42	-0.4
平成17年		10,430	-51	-0.5
平成22年		10,241	-189	-1.8
平成27年		10,423	182	1.8

資料：国勢調査

令和2年	10,994	(参考) 住民基本台帳(令和2年3月末)
------	--------	----------------------

増減率の青森県市町村との比較(上位10位と下位10位)

市町村名	増減率(%)	市町村名	増減率(%)
六戸町	1.8 (1位)	佐井村	-11.3 (31位)
おいらせ町	0.0 (2位)	蓬田村	-11.5 (32位)
三沢市	-2.6 (3位)	大鰐町	-11.9 (33位)
八戸市	-2.7 (4位)	新郷村	-12.0 (34位)
弘前市	-3.3 (5位)	中泊町	-12.2 (35位)
青森市	-4.0 (6位)	外ヶ浜町	-12.6 (36位)
十和田市	-4.1 (7位)	深浦町	-13.0 (37位)
むつ市	-4.2 (8位)	今別町	-14.3 (38位)
田舎館村	-4.5 (9位)	大間町	-17.6 (39位)
階上町	-4.6 (10位)	風間浦村	-19.8 (40位)

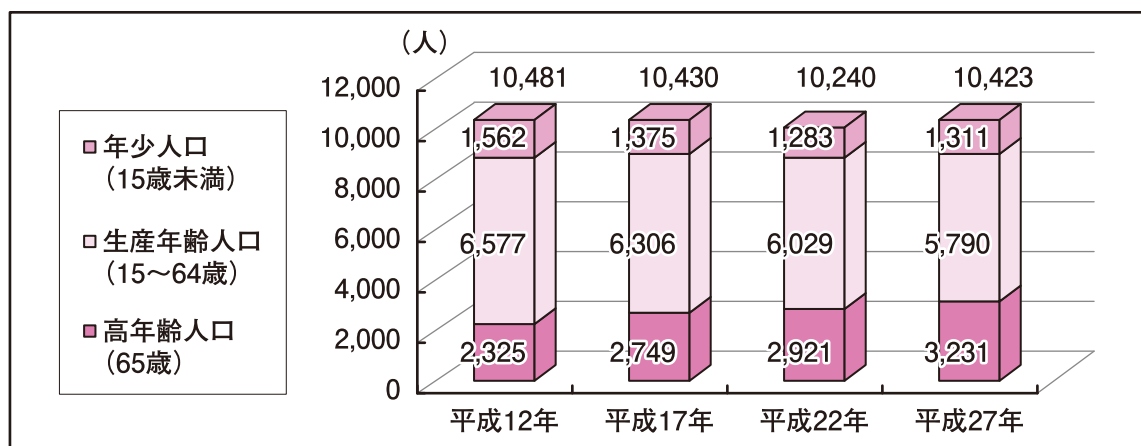
資料：国勢調査

② 年齢3区分別人口

年齢3区分別の人口(平成27年国勢調査)をみると、次のとおりとなっており、それぞれの比率を全国及び青森県と比較すると、15歳未満の年少人口比率(12.7%)は全国平均(12.6%)や青森県平均(11.4%)をわずかに上回り、65歳以上の高齢者人口比率(31.3%)は全国平均(26.6%)や青森県平均(30.1%)をわずかに上回り、全国及び青森県よりも高齢化がわずかに進んでいることがうかがえます。

年齢3区分別人口の推移

項目	年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年
総人口(人)		10,481	10,430	10,241	10,423
年少人口(人)	(%)	1,562 (14.9)	1,375 (13.2)	1,283 (12.5)	1,311 (12.7)
生産年齢人口(人)	(%)	6,577 (62.8)	6,306 (60.5)	6,029 (58.9)	5,790 (56.0)
高齢者人口(人)	(%)	2,325 (22.2)	2,749 (26.4)	2,921 (28.5)	3,231 (31.3)



注) 総人口には年齢不詳を含む。

資料: 国勢調査

年齢3区分別人口比率の全国・青森県との比較(平成27年)

項目	区分	全国	青森県	六戸町
年少人口(%)		12.6	11.4	12.7
生産年齢人口(%)		60.7	58.4	56.0
高齢者人口(%)		26.6	30.1	31.3

注) 年齢不詳を除く。

資料: 国勢調査

2. 六戸町の特性

長所をのばす視点に立ち、これからのまちづくりに生かすべき本町の代表的な特性をまとめると、次のとおりです。

1 ◆ 県南三市の中心に位置する便利なまち

本町は、青森県南の八戸市、三沢市、十和田市の三市を結ぶトライアングルのほぼ真ん中に位置し、それぞれの市の中心部まで10～20kmの距離にあり、三市に近い恵まれた立地条件にあります。

また、上北自動車道や国道45号をはじめ、県道9路線が走り、道路網も充実しているほか、公共交通機関として、路線バスや町民バスが運行され、交通条件にも恵まれており、三沢空港や八戸駅などの高速交通網を比較的容易に利用することができます。



六戸町の位置図

2 ◆ 根菜類の生産を中心とした特色ある農業のまち

本町は、肥沃で広大な土地を生かし、高度な営農技術と経営体制の確立のもと、事業経営としての農業が展開される特色ある農業のまちです。

現在、ニンニクやナガイモ、ゴボウ、ニンジン、ダイコン、ジャガイモ、キャベツ、ハクサイ、ネギなど、根菜類を中心とした多品目の野菜の生産が盛んに行われ、特にニンニクは、県内でも有数の「大玉にんにく」の産地として評価を受けています。

また、特産地鶏の青森シャモロック（プレミアム飼育版を含む）が飼養されており、野菜とともに本町の特産品となっています。



六戸町産野菜の数々

3 ◆ 八甲田を仰ぎ、奥入瀬川が流れる自然豊かなまち

本町は、西方に八甲田連峰を仰ぎ、広大な田畑と森に囲まれ、十和田湖に源を發し、太平洋に注ぐ清流・奥入瀬川が流れる、緑輝く大地とうるおいのある水辺空間、澄んだ空気に包まれた豊かな自然が息づくまちです。

本計画の策定にあたって実施したアンケート調査の結果においても、町の魅力をたずねた設問で、町民、小・中学生、高校生ともに「自然環境が豊かである」が他を引き離して第1位となっています。



館野公園（さつき沼）

4 ◆ 子育て・教育環境が整った子育てしやすいまち

本町では、子ども医療費助成をはじめとする経済的支援や保育サービス・子育て支援サービスの充実、グローバル^{※1}社会の中で活躍できる人財の育成、小中連携教育の推進など、子育て支援や子どもの教育に力を入れています。

また、本町には、500人を収容できるメイプルホールや、様々なスポーツ施設を備えた県内有数のスポーツ拠点である総合運動公園などが整備され、文化・スポーツ環境も充実しており、まさに本町は、子育てしやすいまちといえます。



総合運動公園

※1 世界的な規模であるさま。国境を越えて、地球全体にかかわるさま。

5 ◆ 道の駅をはじめ、独特の交流資源を持つまち

本町には、これまであげてきた農業資源や自然資源、文化・スポーツ資源のほかにも、地場産物販売施設や特産品研究・開発施設等を備えた道の駅「ろくのへ」や、本町のシンボリックな公園である館野公園をはじめ、温泉リゾート施設、ゴルフ場、メイプルタウンフェスタをはじめとする四季折々の祭りやイベントなど、独特の観光・交流資源があります。



道の駅「ろくのへ」

6 ◆ やさしい人が住み、町民活動が活発なまち

豊かな自然や農業のまちとしての歩みなどによって古くから培われてきた町民の人へのやさしさや親切さ、あいさつの精神、人と人とのつながりの強さは、町内外の多くの人々が認める“六戸町のよさ”となっており、これからのまちづくりに生かすべき本町の優れた特性の一つといえます。

また、こうした町民性を背景に、ブランドづくりなど新しいことにチャレンジする意識が育ち、自分たちのまちを自分たちでつくろうとする活動が活発化してきています。



有志団体で行っているあいさつ運動